

神の財宝 銀色に輝く中国後漢の破鏡を発見！

土井・砂遺跡（雲南市加茂町、1997年） 仁木 聡

奈良時代、雲南市加茂町は大原郡神原郷と呼ばれていました。神原の名は、『出雲国風土記』（733年成立）によれば、^{あめのしたつくらししおわかみ}所造天下大神が積み置いた「神御財」に由来しています。

1997年、この神原郷を南北に貫く現在の松江道路の建設に先立つ発掘調査が行われました。発掘された遺跡の名は、土井・砂遺跡。神原神社古墳を眼下に望む赤川の南岸丘陵上にあり、古墳時代初頭（3世紀前葉）の古墳6基と古墳時代後期から終末期（6世紀～7世紀初頭）の横穴墓7穴からなる遺跡です。

かつて加茂町内では、冒頭の伝承を暗示させるかのような考古学的大発見がありました。一つは加茂岩倉遺跡から出土した39個の銅鐸で、もう一つは神原神社古墳に副葬された邪馬台国の女王・卑弥呼が魏に遣いを送った景初三年（239年）銘の三角縁神獸鏡です。入庁1年目の私は土井・砂遺跡の発掘調査を担当することになり、新たな神御財の出土に期待が高まっていました。

それは、丘陵の先端に築造された1号墳（一辺10mの方墳）の棺から見つかりました。神原神社古墳出土の三角縁神獸鏡より古い、中国後漢初期（1世紀前半）の^{ないごうかおんきょう}内行花文鏡の破片（6.5cm×3cm、重さ65.8g）でした。元の鏡の面径は17.7cm以上の大型品に復元されず。発見時、土の中から艶やかな黒色を帯びた物体に、はじめは何だかよくわかりませんでした。少しずつ土を取り除くと、銀色の光沢が目に入ってきました。ようやくそれが鏡の破片であることに気がつきました。副葬当時の輝きが約1700年の時を経て、再び地上に現れた瞬間です。青銅製品は緑青色に錆びてしまった状態で出土するのが一般的ですから、1号墳の青銅鏡は驚異的な保存状態といえます。土井・砂遺跡には1号墳のように神原神社古墳より古く築造さ



土井・砂遺跡 1号墳第2主体部出土の鏡の破片



空からみた土井・砂遺跡（南から）

れているものと、神原神社古墳と同時期に築造された古墳があり、複数の鉄製農具（ヤリガンナと鉄斧）も副葬されていました。このことから、土井・砂古墳群の被葬者たちは、神原神社古墳の被葬者を輩出した有力者とその一族と考えられます。

積み置かれた神御財の中に、土井・砂古墳群から見つかった鏡の破片と鉄製農具も含まれていたと想像してみたくありませんか？

（島根県埋蔵文化財調査センター 調査第一係長）